

吾が国の産業の変遷と青年死亡の推移

羽 生 純 夫

“On the Correlation between the industrial Development
and the Mortality of younger Generation”

Sumio, HABU

序

私はさきに最近の死亡低下が青年層に最も著しかつたこと、及び死因別には「結核」だけでなく「肺炎」「下痢腸炎」「腎臓疾患」「気管支炎」等でも大幅に低下していることを実証した。^(註1)然らばそれが如何なる理由に基くものであるかが重要な問題といわなければならない。一般に死亡現象は複雑な社会環境の総合的な産物と見なすべきで、実験医学の場合とちがい簡単に因果関係を以て律することは出来ない。而して青年層をして社会関係を特に複雑ならしめているものは云うまでもなく彼等が産業の主要な担い手であるということから来ている。一方、労働条件、労働環境の良否が直接、間接に労働者の健康に大きな影響を与えていることは論を俟たないところである。こういう意味から吾が国の産業の変遷とその担い手である青年死亡との関係を検討するのが目的である。

分析及び考察

I. 吾が国の産業の変遷

吾が国の産業が如何なる変遷を辿つたかについては専門外のことで之をよくしないのであるが、年齢階級別の死亡率が国勢調査年度で可能である点を考慮して、極く大まかに次のような時代区分を試み、之と青年死亡との関係を探ることとした。

第一期（明治30年頃から大正初期まで）

吾が国の産業資本の確立期を一応日清戦争後と見る。即ち、日清戦争後の新しい市場の開拓とともに近代産業が急激に発達する。主要産業は生糸、紡績、織物等の繊維工業。日露戦争を契機として重工業の発達があるが前者に比較すると微々たるものである。従つて産業の主な担い手は、先進諸国の産業革命期の場合と同じく婦人少年工、特に12~20歳の女子である。

第二期（大正初期から大正9年まで）

第一次欧洲大戦に当つて、吾が国の産業は飛躍的に発展する。主な工業は繊維工業、金属工業、化学工業などである。このような質的な変化に伴つて産業の担い手として新しく青年男子が大幅に参加するようになる。

第三期（大正10年から昭和初期まで）

欧洲大戦後、異常に膨脹した産業は急に縮少する。但し、一部の産業即ち製鉄、電気、化学工業は尙発展して次期の重工業優位の基礎をなす。然し、全体としては失業群の大量生産、之が農村へ

の還流。

第四期（昭和初期から昭和7年まで）

前記重工業の発展。基盤として軍備縮小に伴う軍の近代化、機械化。鶴見、川崎の工業地帯の出現がよくこの間の事情を語る。一方、この期に頻発した諸種の恐慌は依然として産業活動が縮少過程を辿っていたことを示すものである。

第五期（昭和7年以降、今次の終戦まで）

軍事工業（金属、機械器具、重化学工業）の躍進。国家総動員の言葉が示す通り、産業の担い手がただに青年層のみに止まらなかつたことは尙、記憶に新しいところである。

以上、五期に分つことで、吾が国の産業が戦争を契機として発展し、質的にも変貌をとげたことがわかる。しかも、上昇した生産は軍需産業であり、輸出産業である。従つて、これらがそのまま国民の物的な生活内容を豊富にするものではなかつた。即ち、産業の発展、後退は直接、国民の生活水準の向上、低下と結びつくものでなかつた。

Ⅱ. 青年死亡の推移

青年死亡が上記時代区分毎に如何なる推移をとつたかを図表第一によつて検討する。

第一期（軽工業の発達、産業の重な担い手は青年女子）

第一期の基準として明治21年をとる。吾が国の近代産業の揺籃期とも、産業革命期以前とも見なされる時代で、基準として適当なものといえよう。而して、これが大正2年以降と大きく異つている点は、年齢階級をますにしたがつて死亡率が上昇していることであつて、後者では男女とも20~24歳で一つのピークを作つている。即ちこのことから産業の発達が青年層の死亡に大きな影響を与えたことが推察出来る。^(註2)

而して大正2年と比較した結果は、10~14（女子）15~19、（男、女）20~24、（男、女）は上昇し、25~29（男、女）低下する。又、上昇率は女子がはるかに大きい。このことは産業の担い手が主として若い女子であつたことと照応する。

第二期（発展期、産業の担い手として新たに青年男子が加はる）

男女とも各年齢階級で上昇。上昇率は男女略平行している。

第三期（後退期、大量失業群）男女とも各年齢階級で低下。その割合は男女略平行。

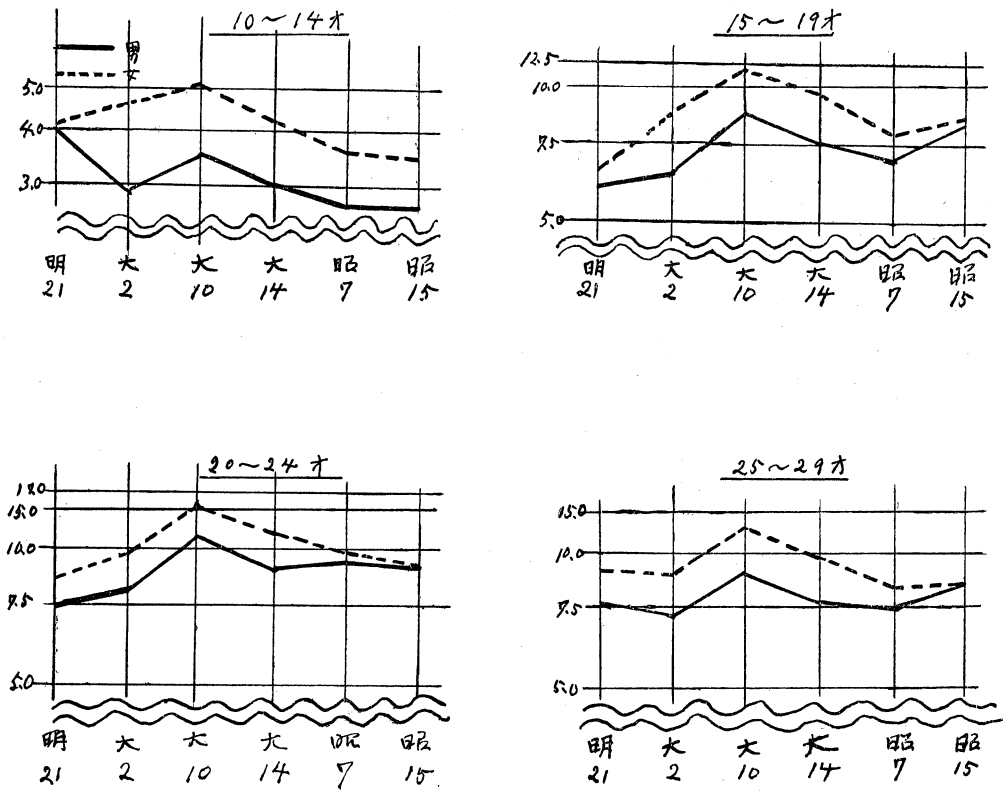
第四期（後退期、重工業優位）

男子で20~24上昇、25~29停滞。女子は総べて低下。その結果、男女の死亡率は接近してくる。

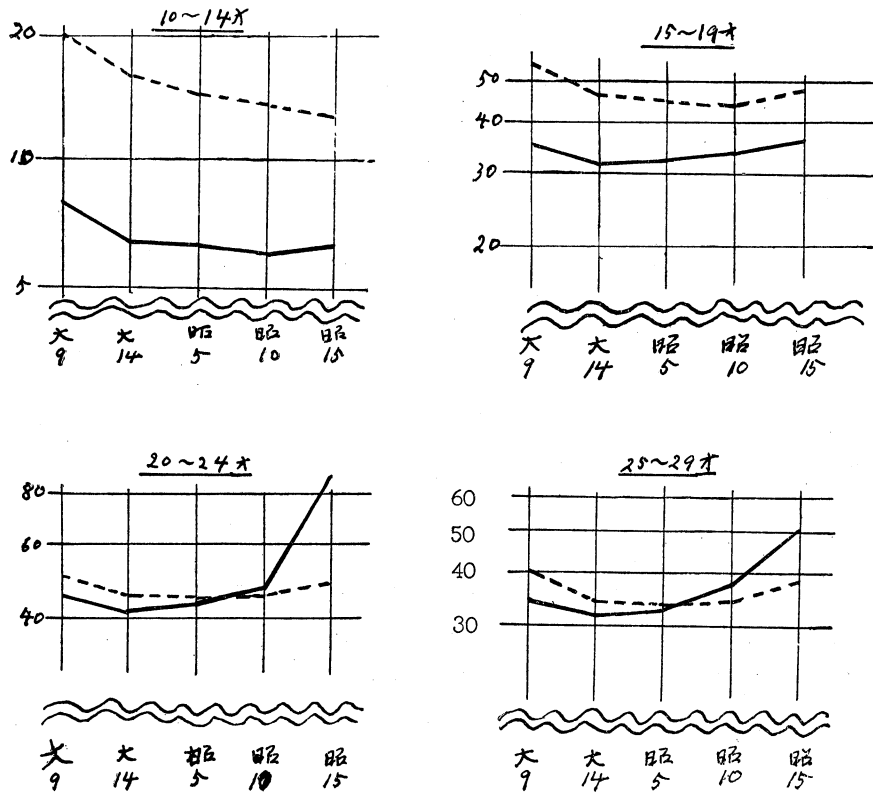
第五期（発展期）

10~14、20~24、男女とも停滞、15~19、25~29、男女とも上昇しており、上昇率は男子に大きい。その結果男女の死亡率は略等しくなる。20~24で停滞している点は了解に苦むところである。或は昭和7年以降も低下を続けその後上昇したのではないかとの想定の下に昭和10年と比較したが矢張り之の点は否定せられなかつた。或は戦時中の動員等と関係があるかも知れないが、はつきりしない。

附図第一 年令階級別死亡率推移



附図第二 年令階級別結核死推移



以上、青年層の死亡率を性別に見た場合、吾が国の産業の変遷との驚くべき一致を見いだすのである。即ち

1. 産業の量的の伸張期（第1, 2, 5期）に死亡率は上昇し、縮少期（第3, 4期）に低下している。

2. 質的の変化、即ち、軽工業から重工業への変化に伴つて（第4期の男子停滞、及び第5期の急激な上昇）両性間の死亡率は接近してくる。

Ⅲ. 病類別青年死亡推移

1. 結 核

社会的疾患の随一であり、且つ青年死亡の首位を占むる結核死亡が産業の変遷とよく一致することとは図表第二に示す通りである。

即ち、大正後半期に男女とも低下、昭和5年以降、男女とも上昇、昭和10年以降の男子に於ける急激な上昇。又性比は、軽工業から重工業への変化につれて死亡率は逆転し、男子の方が高くなる。

2. その他の主要疾患

「下痢腸炎」「肺炎」「気管支炎」「腎臓炎」「心臓疾患」等について調べた結果、「下痢腸炎」「肺炎」では「結核」と略同様な傾向を示すが、その他のものでは第4, 5期で低下の傾向をとつている。疾病の歴史的、社会的推移については別の機会に譲りたいと思う。

Ⅳ. 非労働年齢階級の死亡率の推移

以上述べたように、産業の変遷と青年死亡の間には密接な関係があるが、然らば直接産業の担い手でない年齢階級（ここでは14歳以下及び61歳以上をさし、仮りに非労働年齢階級と呼ぶこととする）とは如何なる関係にあるかを検討する。今、煩をさけるために、非労働年齢階級から5~9, 65~69, 移行期に属する45~49, 55~59を例にとつてその性別死亡率を第5表に示す。

第5表 非労働年齢階級死亡推移

年次 年齢階級	性	明 治 21	大 正 2	大 正 10	大 正 14	昭 和 7	昭 和 15
5~9	男	6.3	4.5	4.9	4.5	4.1	4.0
	女	6.1	4.9	5.3	4.8	4.2	4.0
45~49	男	14.6	13.0	15.7	14.5	12.4	13.6
	女	12.3	10.4	12.3	11.2	10.2	10.3
55~59	男	26.9	25.2	31.4	30.5	28.0	29.1
	女	21.5	18.7	21.7	20.2	19.8	18.6
65~69	男	53.8	53.5	63.2	—	—	63.3
	女	44.9	41.3	41.5	—	—	41.9
61~69	男	—	—	54.5	53.5	51.5	51.4
	女	—	—	38.9	36.9	34.5	33.7

即ち

第一期 男女とも各年齢層で低下，青年層とは逆の關係を示す。

第二期 男女とも上昇，青年層と順の關係を示す。

第三期 男女とも低下，青年層と順の關係を示す。

第四期 男女とも低下，青年層との關係は男子では逆，女子では順の關係を示す。

第五期 男女とも低下，青年層との關係は逆。然し低下率の極めて小さいことは注目に値する。

労働年齢階級に属する45~49, 55~59では，大体上昇の傾向を示し，青年層と同一傾向にある。これらを総合すると，当時の状態の継続は必然的に非労働年齢階級の死亡率の上昇となるのではないかと思はれる。即ち，第二期の傾向直前に位するものと推定することが出来る。

以上，一般論として，非労働年齢階級では大正9年以降漸次低下しており，産業の変遷と必ずしも同一傾向をとつてはいえない。然らば無關係かというにそうとも云えない。たとえ第五期が第二期直前にあつたと仮定しなくても，少くとも非労働年齢階級の死亡率の上昇又は停滞期には，之にもました青年層の死亡率の上昇があるからである。尙，45~49, 55~59で青年層との關係が第一期で逆，第五期で順であることは，産業の担い手が初期の青少年から段々と青壮年層へと移つて来た事実と併せ考へると頗る興味深いものがある。

結 論

吾が國の産業の変遷と青年死亡の推移を対照することによつて次の結果を得た。

1. 産業の伸展期には青年層の死亡率の上昇を，後退期にはその低下を例外なくもたらしている。
2. 産業の質的の變化，即ち輕工業から重工業への変化は，青年死亡における女子の比重減少，男子の比重増加となつて現はれている。
3. 死因別には「結核」「下痢腸炎」「肺炎」が産業の盛衰と軌を一つにしている。
4. 非労働年齢階級の死亡率は必ずしも青年層のそれと同一傾向をとつてはいない。然し前者の死亡率の上昇期又は停滞期には，大幅な青年死亡の上昇がある点からみて，少くとも両者の間には何等かの關係があることが推定される。

要 約

吾が國では青年死亡は産業の發展期には増加し，後退期には低下している。この現象は戦後の死亡低下の要因考察に當つて無視出来ない要素である。

註1 鹿大教研究紀要第5卷(昭和28年)

註2 明治21年の死亡率は吾が國，統計学界の先覚吳文聰先生の著書より引用。

Summary ; —

The mortality of younger generation, in our country, increased with industrial prosperities and decreased with its decay. The gravity of this phenomena can not be disregarded in case of consideration on the factores of mortality-decrease after the war.